
魔弾の射手

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔弾の射手

【Nコード】

N3516F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

三十年戦争直後のボヘミア。青年マックスは愛するアガートとの婚礼を控えていた。しかし婚礼の為の射撃大会での優勝は不調でも無理だった。このことに悩んでいたその時に同僚の悪魔の誘いが。ウェーバーのオペラを小説にしたものです。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

第一幕 悪魔の弾丸

長い戦争があつた。ボヘミアの司教殺害にはじまり新教徒と旧教徒の抗争に発展した三十年戦争は何時しか周辺諸国まで巻き込んだ国際戦争となつていた。

当初この戦争は旧教の守護者であつた神聖ローマ帝国皇帝であるハプスブルグ家とそれに対抗する諸侯達との争いであつた。確かに宗教戦争であつたが実際はこうした帝国内の争いであつたのだ。

しかしこれに皇帝の勝利が決定的になると周辺諸国が動いた。只でさえ欧州に絶大な力を誇るハプスブルグ家のこれ以上の伸張を快く思わなかつたからだ。

まずはデンマークが参戦した。だがこれが皇帝軍に敗れると次にはスウェーデンが参戦した。彼等は共に新教徒の国であつたが彼等の真意は当然ながら信仰ではなく皇帝への対抗であつた。

特にスウェーデン軍は強かつた。国王グスタフ・アドルフ自身が名将であり、彼の指揮により帝都ウィーンへと迫らんとした。しかしそのグスタフ・アドルフが戦死すると彼等も劣勢になつた。ここで戦争はいよいよ国際戦争の趣をていしていく。

ハプスブルグ家の宿敵と言えばヴァロア家であつた。フランス王家である彼等はことあるごとにハプスブルグ家と対立を繰り返して来た。欧州の戦乱、抗争は常に彼等が一方におり、そしてもう一方に彼等が存在するのが常であつた。彼等は常に欧州の覇権を争つて来たのだ。これは宗教的な意味合いではなかつた。何故ならフランスもまたカトリックの国であり王家はその絶対的な擁護者であつたからだ。これはこの時の王家ブルボン家においても同じであつた。ナント勅令が出ていても彼等はあくまでカトリックであつた。

だが彼等は皇帝に宣戦を布告した。これは何故か。

それは当時のフランス、そしてブルボン家の置かれた状況に関係

があつた。彼等はこの時ドイツ、そしてスペインから包囲されていた。両方共ハプスブルグ家の勢力圏である。彼等にとっては危機的な状況であつたのだ。

戦乱はこの時で既に長きに渡つていた。皇帝軍に最早彼等に対抗する力はなかつた。こうして長きに渡つた戦争は終わり神聖ローマ帝国は事実上分裂し終焉を迎えた。皇帝も本拠地であるオーストリアの被害が少なかったこともあり以後はそちらに目を向けた。神聖ローマ帝国からオーストリアへとなつていくかのようであつた。

だが残されたドイツの惨状は目を覆うばかりであつた。戦乱により土地は荒廃し、村も町も焼き払われた。屍が辺りに散乱し、それを喰らう野犬や鳥の群ればかりが目に入った。夜になると何処からか不気味な咆哮が聞こえ、月はまるで血に染まつた様な色であつた。死臭も漂い、廃墟が連なつていた。

そつした状況であつた。世の中は混沌とし、人々は恐怖に怯えていた。森の中にも異形の者の影がちらつき何かしら薄気味の悪い声が聞こえる。ここはそつした森の中の一つであつた。

ボヘミアの森であつた。昼だというのに薄暗い。今この森の酒場で多くの者が集まつていた。

「おい、次は誰だ!？」

見れば獵師達が集まつている。そして大きな木にかけられた的の前にして何やら色々と話をしている。

「マックスらしいぞ」

誰かが言つた。すると中から長身の逞しい身体つきの青年が出て来た。豊かな金髪に青い目をした端正な顔立ちである。精悍で、まるで古の狩人の様である。その漁師の服と帽子がよく似合っている。しかしその表情は何処か冴えない。

「上手くやれよ」

「頑張れよ」

同僚達が彼に声をかける。彼、マックスはそれに頷いた。

「ああ」

だが声は晴れない。何かしらもやがかかったようである。

マックスは木の前に出た。そして銃を構える。

「いよいよだな」

「いけるかな」

人々は彼を見ながらそう囁いている。マックスはその声は何処か神経質になつていようである。

「マックスなら大丈夫だろう」

そういう声が聞こえてくる。だが彼の心の中はそうではなかった。

(いけるか)

彼はふとそう思った。そしてここで思い直した。

(いや)

同時に不安が心の中を覆っていく。

(しなくてはならない)

そう自分に言い聞かせた。その迷いが狙いに影響が出たのは至極当然のことであった。

銃声が鳴り響く。だが的は壊れはしなかった。ただ銃声だけが空しく響いただけであった。

「ああ……」

マックスはそれを見て絶望した声をあげた。的は彼を嘲笑うかのようにその場に元のまま留まっていた。

「駄目だったか」

人々はそれを見て口々にそう言った。

「まあこういうこともあるさ」

「だがこれで優勝は決まったな」

「ああ、キリアンだ」

人々はここで農夫の服を着た男の周りに集まった。

「おめでとう、あんたが優勝だ」

「いやいや」

その農夫の服を着た恰幅のよい男に人々は花束や帯緩を手渡す。

彼はそれを笑顔で受け取っていた。

「まさかわしが優勝するなんて思わなかったよ。いや、こんなことはじめてだ」

「おや、そうだったのかい」

人々はそれを聞いて彼にそう尋ねた。

「ああ、若い頃からあまり上手くはなかったからな。それにここんとは」

「マックスがいつも優勝していたからな」

ここで人々は的の前で暗い顔をして立っているマックスに目をやった。

「今日はどうしたんだろうなあ。いつもだったら訳なく当てるのに」

「それだよ。何かあったんじゃないか」

「何かって何なんだよ」

「おいおい、それまではわからねえよ、わしにも」

こうした話をしながら彼等はマックスを見ていた。やがて彼は的の前から離れキリアンの前に来た。

第一幕その二

「優勝おめでとうございます」

彼はそう言っつて帽子を取り頭を下げた。キリアンは謹んでそれを受けた。

「いやいや。それにしても」

そして彼は問いにかかった。

「それにしても？」

「今日の御前さんはどうしたんだい？やけに調子が悪いようだが」

「それは……」

マックスはそれを受けて口ごもった。

「何かあるのか！？いや、嫌味じゃないぞ」

「わかつています」

誰も嫌味なぞ言っつたりはしない。ただ彼のことを心配しているのだ。

「御前さんにしては悪過ぎないか！？悩みでもあるのか」

「いえ」

彼はそれを誤魔化そうとする。ここで誰かがやって来た。見れば獵師の服を着た初老の男だ。歳の割に姿勢はよく歩き方もしっかりとしている。

「あ、これはどうも」

「うむ」

人々の挨拶を受けて彼は挨拶を返す。森林保護官のクローノである。

「何かあったのか！？見たところ射撃大会が終わったようだが」

「はい、その通りです」

「そうか。ではとりたてて騒ぐことでもあるまい。で、優勝は誰だ！？またマックスか」

彼は当然だろうといった顔で人々に問うた。だがその返事は彼が思っていたものではなかった。

「キリアンです」

「何っ、本当か!？」

そしてそれを聞いて思わず目を見張った。

「はい、それがこの証拠です」

見ればキリアンの手に花束と賞品の帯緩がある。それだけ見ればもうわかることであつた。

「ううむ」

クーノはそれを見て考え込んだ。

「信じられない。マックスは一体どうしたのだ」

「それが……」

村人達は言えなかつた。だがマックスはそれを自分自身で言った。

「一発的に当たりませんでした。嘘は言えません」

「そうか」

クーノはそれを聞きながらもまだ信じられないといった面持ちであつた。

「どうしたのだ。最近不自然なまでに調子が悪いぞ」

「はい」

マックスはクーノの心配そうな顔と声に暗い顔と声で頷いた。

「何かあつたのか!？何なら相談に乗るぞ」

「はあ」

やはり彼の声は晴れなかつた。

「明日のことがある。こんな調子では本当に心配だ」

「すみません」

「謝る必要はない。だがな」

彼はここで顔を悲しく、そして厳しくさせた。

「明日の試験射撃で失敗したら御前と娘であるアガーテの結婚は認めることができない。それはわかつてくれ」

「はい」

彼はやはり悲しい顔で頷いた。

「頼むぞ、本当に。このままでは一体どうなるのか。明日はわしを

喜ばせてくれ」

「はい」

「あの」

ここで人々がクローノに尋ねてきた。

「何だ？」

「その試験射撃とは何でしょうか。時々聞きますが」

「そういえば私も」

キリアンもそこで言った。

「一体何なのでしょう。宜しければお教え下さい」

「うむ」

彼はそれに頷いて説明をはじめた。

「私の先祖もまた猟師だったのは知っているな」

「ええ」

これは彼等にとっては言うまでもないことであった。皆それに頷いた。

「御領主様のお側におつてな。ある日その御供で森に入った時一匹の鹿を見つけたのじゃ。だがその鹿は普通の鹿ではなかった」

「といたしますと」

これは彼等にとつても初耳であった。思わず問うた。

「その鹿には一人の人間が鎖で繋がれていた。何故だかわかるか」

「いえ。何かの罰だとは思いますが」

「そう、罰だったのだ。昔は森の法に従わぬ者をこうして罰していたのだ」

「そうだったのですか」

「うむ、だが御領主様はそれを見て気の毒に思われた。そして周りの者に対して申されたのだ。罪人を傷つけることなく鹿を仕留めた者には褒美をやるうと。我が先祖もそれに従った」

「その褒美は」

「うむ。この森の一部と城を一つだった」

「それは凄い」

それを聞いた人々は思わず声をあげた。

「そしてどうなりました!？」

「我が先祖は見事鹿を撃った。そして見事森と城を手に入れたのだ」
「そうでしたか。そして鹿に繋がれていた罪人はどうなったのです
ようか」

「命に別状はなかった。少し傷は負っていたようだがな」

「それは何よりです」

人々はそれを聞いてホッと胸を撫で下ろした。

「それにしても素晴らしい御先祖様です」

「本当に。おかげで哀れな罪人が救われました」

「そう、そしてそれが試験射撃のはじまりとなったのだ。それを記念してな。長い戦争だったがこの辺りは幸い戦禍に遭わずに済んだ」
「はい」

「それで今も残っている。いいことだと思わないか」

「はい、そう思います」

皆それ賛同した。

「だがな。先祖のこの功績を妬んだ者がいた。これも何時でもある話だな」

「そうですね、残念なことに」

「そしてこれを中傷した。先祖が悪魔の弾を使ったのだと」

「悪魔の弾!？」

「それは一体何でしょうか。よからぬもののはわかりますが」

「確か七つあるのですな」

「ここでキリアンが言った。」

「そうだ。よく知っているな」

クーノがそれを聞いてキリアンに顔を向けた。中にそれを聞いてギョツとしている者がいた。

「俺のことか!？」

それは獵師の一人であった。背が高く逞しい身体をした黒い髪と髭の男である。その顔は暗く、少し歪みの様なものが見受けられた

目の光も暗く、何かよからぬことを考えているような顔であった。彼の名をカスパールという。この村では腕利きの獵師の一人として知られている。

「それが問題になってな。一時は異端審問官まで呼ばれそうな話だったという」

「本当ですか!？」

誰もが異端審問官の名を聞いて顔を青くさせた。それはこのボヘミアの森においてさえ恐怖の象徴であるのだ。

「うむ。それを重くみた御領主様はこの競技を開くにあたり自ら見られることとなった。そしてその場で参加者及び優勝者の潔白を確かめられる」

「当然ですな」

「本当に。異端審問なんかが行われていたらと思うと」

「同時にそこで優勝者は花嫁を選ぶこととなった。優勝した褒美の一つとしてな。その花嫁はその時に花の冠を被る。悪魔を退ける花の冠をな」

「そうして悪魔を完全に追い払うというわけですね」

「そうでもしないと。悪魔がこの森に潜んでいるというのは事実なのだし」

「ええ」

人々はそれを聞いて暗い顔になって頷いた。

「いますね、確かに」

「あの悪魔が」

森の奥を見る。そこにはその悪魔が潜んでいると思われるのだ。

「ザミエル……」

誰かがその名を呟いた。それを聞いた全ての者の背筋が凍るようであった。

「さてマックスよ」

クーノはここでマックスに顔を戻した。

「はい」

マックスはそれを受けて答えた。

「期待しているからな。それだけはわかってくれ」

「はい」

だがその返答は暗く沈んだものであった。やはり自信がないのだ。

第一幕その三

「それはわかっています」

「ならいいのだが」

しかしクーノも彼の顔を見て不安を禁じ得なかった。

「我が娘アガーテが御前を待っているんだからな」

「アガーテ」

その名を聞いたマックスの顔が少し明るくなった。だがそれは一瞬のことであつた。

「絶対に優勝しないと。さもないと僕は彼女を」

「そうだ。その心意気だ」

クーノはそう言いながら彼の肩を優しく叩いた。

「頼んだぞ」

「ええ」

そしてクーノは村人達と話をはじめた。マックスはその輪から少し離れる形となった。そこにカスパールがやって来た。

「なあマックス」

彼は親しい素振りで彼に話し掛けて来た。

「何だい、カスパール」

「ああ、かなり不安そうだから心配になつたんだが」

彼はこの時努めて親しい素振りを装っていた。だが悩んでいるマックスはそれには気付かなかつた。

「すまないな」

「いや、いいさ。ところでだ」

「うん」

そして彼はカスパールのその親しげな様子に心を解かされていった。何時しか彼の話の中に誘われていった。だがここでクーノが再びマックスの方に来た。

(ちっ)

カスパールはそれを見て内心舌打ちした。しかしそれはやはり外には出さなかった。

彼はとりあえずは身を引いた。だが皆の後ろで尚もマックスを見ていた。それは獲物を罾にかけようとする獣の様な目であった。

「私はこれで行く。御前はどうするのだ」

「少しここで考えさせて下さい」

「そうか、わかった」

彼は少し思うところがあつたがそれを認めた。とりあえずはそつとするのもいいと思つたからだ。

「ではな。気を確かに持てよ」

「はい」

マックスは頷いた。

「落ち着いてやればいい。そうすれば御前の腕なら間違ひなく優勝だ」

「有り難うございます」

「では諸君、明日を楽しみにしよう」

「はい」

皆それに応えた。

「明日は好きなだけ狩りを楽しめる。そして目出度い祝福の日だ」

「マックスとアガーテの」

「そうだ。私の素晴らしい婿を迎える日だ。皆でそれを祝ってくれ」

「言われなくとも」

「獲物と酒を楽しんだ後で」

「そうだ。では行こう。御領主様も来られる。皆で心ゆくまで祝い、楽しもうぞー！」

「はい！」

そして彼等はクーノと共にその場を後にした。そのまま酒場に入つて行つた。

「行つたか」

一人残つたマックスは酒場の方を見て呟いた。店の中からはもう

朗らかな笑い声と明るい音楽が聞こえてくる。もう酒盛りがはじまっているのだ。

「今僕はある中に入ることにはできない。入ることが出来たなら何と喜ばしいことだろうか」

溜息混じりにそう呟くその後ろ、森の中から何者かが出て来た。

それは暗い緑と金の飾りがついた深紅の猟師の服を着た大男であった。同じ飾りに加えて鳥の羽根が着いた紅の帽子を目深に被っている。その奥に見えるその顔は深い青い髭に覆われておりその目は赤黒かった。そして異様に蒼ざめた顔をしていた。

その男はマックスを見ている。だが彼はそれには気付かない。

「明日だ。遂にこの日が来た」

彼は呟く。その間男はゆっくりと森から出て来た。そして木の側で彼を見ている。

「苦しい。しかも先が見えない。一体どうしたらいいんだ」

マックスは苦しい顔をしている。後ろの男はそれを受けてかマックスの方に行こうとする。だがそれを止めた。

「このままでは駄目だ。神よ、僕はどうすればいいのでしょうか」

神という言葉に後ろの男は反応した。顔を顰めさせた。

「この苦しみは希望を覆い潰し、悩みは尽きることがない。僕はどうしたらいいんだ」

今にも頭を抱えそうな様子であった。

「森に入り、野を越えて獲物を捉えてきた。そして愛しいあの娘にその獲物を捧げてきた。だが今はこの銃が獲物を捉えることはなくなつた」

彼は嘆いていた。男はその間に彼の後ろに来ていた。

「神に見棄てられたのであろうか。それとも悪魔に魅入られたか。どちらにしろ今僕は苦しみの中にいる」

男は一旦何処かへ姿を消した。まるで影の様に急に姿を消した。

「あの娘の望みも僕の望みも変わってはいない。だが今僕には絶望が口を開いて待っている。これから逃れるにはどうしたらいいのだ

ろうか」

その後ろで男は再び会姿を現わした。木にもたれかかってマックスを見ていた。

「神は何処におられるのか」

それを聞いた男の顔が再び歪んだ。

「そして僕は救われるのだろうか。何時この絶望の状況から逃れられるのだろうか」

男はそれを冷たい目で見ていた。だがやがてそれにも飽きたのかまた影の様に姿を消した。そして何処にもいなくなった。

マックスは一人酒場の外の椅子に腰掛けた。ここでカスパールがやって来た。

「おい」

そしてマックスに声をかけた。

「何だい？」

彼はそれを受けて顔を上げた。言うまでもなく暗く沈んだ顔であった。

「どうしたんだ、そんなに沈んで。さっきのことか？」

「ああ、けれど大丈夫だよ」

彼は無理をして平静を装った。

「だから一人にしておいてくれ」

「そういうわけにはいかないな」

だがカスパールはそれを拒んだ。そして店の中に声をかけた。

「おばさん、グラスを二つ。赤を頼むよ」

「あいよ」

店の中から声が返ってきた。それを受けてカスパールはニヤリと笑った。

「もう少し待ってるよ。すぐに来るからな」

「気持ちは有り難いけれど」

今は飲みたくない、そういった顔であった。だがカスパールはそんな彼を宥めることにした。

「まあ聞け」

「ここでおかみが酒が入った杯を二つ持って来た。カスパールはそれを受け取ると一つをマックスに手渡した。

「ほら」

「うん」

彼は仕方なくそれを受け取った。そしてカスパールに顔を向けた。

「まあここは飲め。森林官様からのおごりだぞ」

「しかし」

「あの方の御厚意をむげにすることは止めた方がいいぞ」

「そういうことなら」

マックスはそう言われ渋々酒を口に近付けた。そして飲んだ。カスパールはそれを見て安心したような笑いを作った。

「よし、それでいいんだ」

「ああ」

だがマックスの顔は晴れなかった。

「悩みなんて生きてる限り尽きやしない。しかしそういう時の為にこれがあるんだろうが」

カスパールはそう言いながら杯を指差す。

「だから飲め。折角明日は可愛い花嫁を迎えるというのに」

「だから不安なんだ」

マックスはやはり暗い顔でそう答えた。

「わかるだろ、今の僕だと」

「そうやってまた愚痴を言うつもりか」

しかしカスパールはそんな彼を叱り飛ばす様に言った。

「そんなことだと出来るものも出来やしないぞ。いい加減にしろ」

「しかし」

「しかしも何もない。いいか」

彼は激昂したふりをして話をはじめた。

「俺があ戦争に参加していたことは知っているだろう」

「ああ、それは聞いている」

「その時に習ったんだ。人生つてのはな、この酒とカードと女がいればそれで充分だってな。それから言うんだ」

「僕にかい？」

「そうだ、他に誰がいる。いいか、よく聞けよ」

「ああ」

マックスは渋々ながらも耳を傾けさせた。

第一幕その四

「手に入れたいものは何としても手に入れる。これもそこで習ったことだ。戦場では武器も自分で調達しなければならん」

「そうだったのか」

「当たり前だ。お偉方は自分のことばかり考えている。俺達のことなんて駒かその程度にしか思っちゃいない。だから俺達もまず自分達が生き残り、分け前に預かることを考える」

「そうした時代であったのだ。またそうしないとこの時代の神聖口――マ帝国領内では生きてはいられなかった。戦乱が覆い、傭兵や夜盗達が跳梁跋扈する。そんな中を生きていくにはそうした考えと行動でないと生きてはいられなかったのだ。」

「どんな手段を使ってもだ。わかったな」

「どんな手段も」

「例え悪魔に魂を売ってもだ。わかったか」

「ああ」

マックスは力なく頷いた。

「聞け」

ここで教会の鐘が鳴った。

「七時の鐘だ。もう夜になる」

実際に空はもう暗くなっていた。遠くから梟の声も聞こえて来る。ホウ、ホウ、とまるで森の奥から響き渡る様にして鳴っていた。

「この森には色々いてな。それこそ色々ある」

「色々か」

マックスはそれを聞いて森の中を見た。その奥に何がいるかは聞いている。

「今夜は特に何かが起こる。それも御前さんにとってよいことだ」

「よいこと。それは」

「知りたいか」

カスパールは笑ってそう問うた。

「嫌だと言つても言うだろう」

「ははは、確かにな。いいか」

「ああ」

「まずはこれを見る」

カスパールはそう言つと上を指差した。もう暗くなっている空に大きな鳥が飛んでいた。

「あれを撃ち落してやろう」

「そんなこと出来る筈がない」

マックスはそれを聞いてこう答えた。

「当たる筈がないだろう」

「まあ見ている」

だがカスパールは笑ってそう言った。そして銃を構えた。

「悪魔の名において」

「悪魔の」

見ればカスパールの顔が禍々しく歪んでいる。何処からか不気味な哄笑が聞こえてくるようだ。そしてカスパールは銃を放った。

銃声が轟く。まるで地の底から響き渡る様な音がした。そして鳥が落ちてきた。それは二人の前に落ちた。

「どうだ」

カスパールはその鳥を手を取ってマックスに誇らしげに見せた。

「これで俺の言うことを信じる気になったか」

「ああ」

マックスは頷いた。

「だが一体どういうことだ？あんな距離でしかも暗い中で当てるなんて」

実際鳥は見えるか見えないかであった。それに当てるとは最早人間業ではなかった。

「秘密があるのだ」

カスパールは自信に満ちた声でそう答えた。

「秘密!？」

「ああ、弾にな。それを教えてやろうか」
「ううむ」

マックスはそれを聞いて考え込んだ。どのみち断ってもカスパーに無理にでも誘われるだろう。ならば答えは決まっていた。

「わかった。教えてくれ」
「よし」

カスパーはそれを受けて了承したように頷いた。

「じゃあ今夜狼谷に来い」

「狼谷にか!？」

それを聞いたマックスの顔が青くなった。

「あそこへ行くのは」

「何かあるのか？」

「あの谷には昔からよくない噂がある。悪魔が出るそうじゃないか」
「欲しくないのか？魔法の弾が」

だがカスパーはここで囁くように言った。

「魔法の弾があると御前の望みも適うのだぞ」

そして巧みにマックスを誘いはじめた。誘惑の声であった。それを聞いたマックスの顔色が青いものから困惑したものに変わっていく。

第一幕その五

「望みが」

「そうだ。アガーテがな。その為には何でもしたいだろう」
「・・・・・・・・」

マックスは沈黙した。明らかに迷っていた。そこでカスパールは銃弾を一つ取り出した。

「使ってみろ」

「これがその魔法の弾か」

「そうだ。一度試しに撃つてみたらどうだ」

マックスはそれに従い銃弾を手に取りうとする。だがあともう少しのところまで動かなくなった。

「どうした!？」

カスパールはそれを見て問うた。

「いや」

マックスはここで何か不吉なものを感じていたのだ。

「受け取ったら」

「どうなるというのだ?」

「何か大変なことになるかも知れないからな」

「ほお」

カスパールはそれを受けて嘲笑する顔を作った。やはりあくまで作っただけである。だがマックスはそれには気付かない。

「ではこのままでいいのだな」

「どういう意味だ!？」

「さっきから言っている通りだ。それでわかるだろう」
「・・・・・・・・」

マックスは再び沈黙した。

「アガーテが欲しいだろう」

「ああ」

「ならば受け取れ。そうすれば御前の望みは適うのだ」

マックスはまだ迷っていた。だがアガーテの名を聞いたら受け取らずにはいられなかった。

「わかった」

遂に彼は受け取った。カスパールはそれを見てニヤリと笑った。

「よし、ならばいい」

そして彼は上を指差した。そこにはまた大きな鳥が飛んでいた。

ここでマックスは気付くべきだったかも知れない。何故夜に梟やミミズクでもない鳥が飛んでいるのかを。だが今の彼にはそこまで考える余裕はなかった。

「あれを討ってみる。試しにな」

「ああ」

マックスはそれに従った。上に向けて構える。

「撃て」

カスパールはマックスに囁いた。マックスは言われるままそれに従う。ここでカスパールは心の中で呟いた。

(悪魔の命じるままにな)

マックスは撃った。そして鳥が落ちてきた。それを見たマックスは流石に驚いた。

「本当に当たった。信じられない」

「どうだ、これでわかっただろう」

カスパールはそれを見て自信に満ちた笑みを浮かべた。

「これが魔法の弾の力だ」

「信じられない、本当に」

「戦場ではな」

カスパールはここで話をはじめた。

「硝煙と爆風の中にある。とても敵なぞ見ることはできない」

「そうなのか」

マックスは戦場に出たことはない。だからそれについては知らないのだ。

「そうだ。そんな状況で敵を倒して生き残るにはどうすればいいと思う？」

「運任せでは駄目だろうな」

「運も必要だ。だがな」

彼は言葉が続けた。

「魔法も必要なんだ。この弾にある魔法がな」

「そうだったのか。ではその魔法の弾は」

「そうだ、戦場で見つけてきたものだ」

彼はそう告白した。

「わかったな、これで。この弾が欲しければ今夜」

「狼谷に」

「そうだ。必ず来いよ。わかったな」

「ああ」

マックスは頷いた。その顔には何故か闇がさしていた。

「絶対に行こう。待っていてくれ」

「うむ」

こうしてマックスはひとまず自身の家へと去った。そしてカスパール一人となった。

「これでよし。新たな身代わりが手に入ったぞ」

彼は悪魔的な笑みを浮かべていた。陰が指し、その目は異様に吊り上っていた。

「マックスよ来い、そしてザミエルよ楽しみにしている」

そして呟きながら笑っていた。

「全ては俺の為に。そして俺の命の為にマックスよ」

ここでマックスの名を口にした。

「貴様には代わりに地獄に落ちてもらおう」

そう言つと酒場に戻った。そして何食わぬ顔で宴を楽しむのであった。

第二幕その一

第二幕 狼谷の儀式

クーノの家である。ここはその先祖が領主より褒美として貰い受けた城であり外見は古風であり内装も質素である。壁には鹿の頭や古い壁掛けがあり、カーテンも白い質素なものである。クーノの趣味であろうかその内装は実に穏やかなものであった。椅子もテーブルも檜の木で作られた頑丈なものであった。扉もそれに同じである。今その扉の前に一人の少女がいた。小柄で麻色の髪に緑の目を持つ可愛らしい少女である。その頬にはソバカスまである。青い服を着ている。

「よいしょっと」

彼女は壁に絵を掛けるとそれに釘を打っていた。カンカンと音を立てながら絵を取り付けていう。

「やれやれ。こうも壁が厚いと」

彼女は打ちつけながらぼやいていた。

「絵を取り付けるのも一苦労だわ」

ぼやいていると扉が開いた。そしてそこからもう一人少女が入って来た。

「あら、お帰りなさいませ、アガートお嬢様」

「只今、エンヒエン」

アガートはその少女の名を呼んで挨拶を返した。白い服を着た長身の少女である。豊かな金髪に湖の色をした澄んだ瞳、まるで森の妖精の様に清楚で整った顔立ちをしている。この家の主であるクーノの娘でマックスの婚約者でもあるのだ。

「隠者様はお元気でした？」

「ええ」

アガートはエンヒエンの問いに答えた。

「いつもとお変わりなかったわ。そして私を祝福して下さい」

「それはよかったですわね」

エンヒエンは絵を取り付け終わり下に降りてきてそう言った。

「そして隠者様からこう言われたの」

「何て？」

「銀の後に渡される薔薇が私を守ってくれるだろう、って。そして幸せは少し遅れるかも知れないと。どういう意味でしょう」

「ううん」

エンヒエンはそれを聞いて少し考え込んだ。

「エンヒエン、貴女にはわかる？私はそれがどういう意味がよくわからないの。悪い意味じゃないでしょうけれど」

「私も悪いことではないと思います」

エンヒエンもそう答えた。

「悪い意味でないならそんなに心配することではありませんよ。人間ふさぎ込むのが一番駄目ですから」

「ええ」

「ですから努めて明るくしましょう。そうすれば幸せなんて自分からやって来ますよ」

「有り難う」

アガートはその言葉を受けて感謝の言葉を述べた。

「いつも貴女にはそうやって励ましてもらってるわね」

「いえいえ」

だがエンヒエンはそれには手を横に振った。

「私は明るいのだけ取り柄ですから。お気になさらないで下さい」

「けれど」

「けれども何もありませんよ、お嬢様」

彼女はまた言った。

「もうすぐ結婚、だったら明るくならない筈がありませんよ。ですから明るくなりましょうよ」

「そうですね。けれど」

「けれど？」

「やっぱり不安なのよ。あの人のことが心配で」

アガーテは俯いてそう言った。

「マックス様のことか？」

「ええ」

彼女は答えた。

「ほら、最近何か調子がよくないらしいし。明日もしものことがあれば」

「あれば？」

「結婚できなくなるかも知れないのよ。そうになったら私」

「またそうやって塞ぎ込まれる」

エンヒェンはふう、と溜息をついてそう言った。

「あの方に限ってそのようなことはありませんよ」

「けど」

だがアガーテは不安を禁じえなかった。エンヒェンはそんな彼女に対してこう語った。

「あの方が好きなのでしょう？」

「ええ」

「でしたら」

彼女はここで絵を取り付け終わった。

「とりあえずこちらはこれでお終い。御先祖様はやっぱり上におられないと」

「そうね」

アガーテもそれに同意した。

「ところで」

そしてエンヒェンは話を戻しにかかった。

「あの方のことですけれど」

「マックスの」

「そうです。綺麗な金髪に青い瞳に整ったお顔、ご不満はおありで？」

「まさか」

アガーテはそれに首を横に振った。

「私なんかには勿体ない程だわ」

「そうでしょう。おまけにスラリとしておられる。容姿は問題なし」
ここで彼女は下に降りて来た。

「それだけでなく獵師としても言うことなし。人柄も素晴らしい、
と非の打ち所がありませんわ」

「そうだけれど」

「それなのに何が不安でして？」

「隠者様の御言葉が」

「あら、隠者様の」

「そうなの。エンヒエン、これを見て」

彼女はここで一輪の花を取り出した。それは白い薔薇であった。

「薔薇」

「そう、薔薇よ。隠者様が下さったの。これを忘れるな、って」

「何故ですか？」

「この薔薇が私を守ってくれるからって。どういう意味かわからな
いけれど」

「守って下さるのですね」

暗い顔のアガーテに対してやはりエンヒエンは明るいままであっ
た。

「でしたら問題はありませんわ」

そしてやはり明るい声でこう言った。

「そうかしら」

「お嬢様」

エンヒエンはアガーテに微笑みながら話をはじめた。

「私の父が軍人だったのは御存知ですわね」

「ええ」

「その父が言っていましたわ。恐怖を嘲ると」

「恐怖を」

「そうですね。そうしたら恐怖は逃げて行くと。わかりましたわね」

「貴女がそう言うのなら」

それを効いてアガーテの顔色は少しよくなった。それを見たエンヒエンは続けた。

「その薔薇を大切にして下さいね。それがお嬢様を御守りするのでしたら」

「ええ」

「とりあえず今は夜の新鮮な空気に当てておきますね」

エンヒエンはアガーテの手からその薔薇を受け取るうとする。だがアガーテはそれを止めた。

「待って」

「どうしました？」

「もうちょっと持っていたいの。マックスに会うまでは」

「そうですね。ではわかりました」

エンヒエンはそれを受けて手を引いた。

「御免なさいね」

「いえいえ」

エンヒエンは笑顔で引いた。

「では私は隣の部屋に」

そう言っ出て行くうとする。

「何かあるの？」

「あちらにも用事がありました。それでは」

「はい」

彼女は出て行きながら心の中でアガーテを見て微笑んでいた。

第二幕その二

(あてられるわね)

そう思いながら部屋を出た。後にはアガーテだけとなった。

彼女は窓の方へ歩いて行く。そしてそれを開ける。明るい星達が目に入ってきた。

「星は綺麗に瞬いているけれど」

しかし彼女の顔は晴れなかった。

「私の心は晴れない。そしてあの人のことが胸を締め付ける。明日もしかすると……。どうしてそんなことばかり考えてしまっのかしら」

星を見上げながら言う。だが星達は答ええない。彼女の憂いはさらに深まっていく。

森に目を移す。星達が瞬く空と違い深い闇の中にあるようであった。

「あの静かな森の中にあの人は今もいるのかしら。獣や魔物が潜むあの森に」

森も沈黙していた。やはり何も語らない。それがかえってアガーテの心の中の不安を増大させていく。

「彼等が息を顰めるあの中にあの人がいるのなら私はどうすればいいの？ 私には待つことしかできないのかしら。何という辛いことなのでしょう、魔物に誘われるあの人に何もできないなんて」

手にある薔薇を見る。その薔薇は闇夜の中でも白く輝いていた。そしてその光がアガーテの心を照らした。

「隠者様の下さったこの薔薇が私を守って下さるのなら」
今度は薔薇に囁いていた。

「あの人も守って。お願いだから」

やはり薔薇も答ええない。だが微かに光を増したように見えた。

ここで扉をノックする音が聞こえてきた。

「誰？」

「私です」

それはエンヒエンのものであった。

「どうぞ。何かあったの？」

「お客様ですよ」

彼女の声は先程のものよりも明るいものであった。

「お客様」

「はい。是非お嬢様に御会いしたいと。如何なされますか？」

「どなたなの？それによるけれど」

「お嬢様が最もよく御存知の方ですよ」

エンヒエンの声は笑っていた。それを聞いてアガーテの警戒が解かれた。

「誰かしら」

そう思いながらも悪いようには思えなかった。そしてこう言った。

「是非こちらに迎えて」

「わかりました」

するとすぐに扉が開いた。

「どうぞ」

エンヒエンが扉を開けるとそこから長身の若者が部屋に入ってきた。アガーテは彼の姿を見て思わず喜びの声をあげた。

「マックス！」

「アガーテ」

彼は微笑んでいた。そして笑顔で彼女の側に来た。

「起きていてくれたんだね」

「ええ。貴方のことを思って」

「そうだったのか、有り難う」

彼はそれを聞いてさらに笑った。

「では君にこれを捧げるよ」

そう言っただけで自分が被っている帽子についた羽根を取った。そしてそれをアガーテに差し出した。

「これは」
「今日撃ち落した鳥の羽根さ。是非受け取ってくれ」
「喜んで」
「アガーテはそれを笑顔で受けた。」
「貴方の下さったものですから」
「有り難う」
「けれど本当に大きな羽根ね。私こんな羽根見たのはじめてよ」
「彼女は窓から入る月と星の光でその羽根を見て言った。」
「何処でこんな羽根を持った鳥を撃つたの？よろしければ教えて」
「いつもの森さ」
「彼は答えた。」
「いつもの」
「そうさ、けれど特別な方法でね」
「特別な!？」
「それを聞いたアガーテは思わず首を傾げた。」
「そうなんだ。そしてもう一つ獲物があるんだ。その特別な方法で捕まえた幸運がね」
「それは何!？」
「十六又角の大きな鹿さ。今からそれを家まで引つ張っていかなくちやならないけれど」
「鹿を」
「そうなんだ」
「それは何処にあるの？その鹿は」
「かなり遠い場所さ」
「何処なの？」
「アガーテはさらに聞いた。」
「狼谷さ」
「その谷の名を聞いたエンヒェンとアガーテは顔色を失った。」
「狼谷!？」
「ああ」

マックスはそれに頷いた。

「何かあるの？」

「何かって」

「あの谷のことは知っていますよね!？」

「勿論だよ」

マックスは素っ気無い様子でそう答えた。

「では何故」

「アガーテ」

しかしここで彼はあえて強い声を出した。

「狩人が恐れてはならないよ」

「けど」

「僕は大丈夫だ。夜中に何度も森の中を歩いてきている。時にはくまや狼に襲われたり囲まれたりしたこともある」

「それなら」

「だからこそだよ。だからこそ僕は恐れはしないんだ」

「けれどマックス」

アガーテはそれでも言わずにはおれなかった。

「あの谷にいるのは熊や狼じゃないのよ」

「魔物か」

「そう」

アガーテは答えた。

「あの森だけでなく夜の世界を司る魔王がいると言われているわ。」

そんな場所に行ったら」

「だから大丈夫だと言っているじゃないか。魔王?そんなものを恐れはしない」

彼はアガーテを安心させるように話した。

「樫の木が嵐に唸り、烏や梟が空を覆っていても僕は恐れなかった。今更魔王なぞ」

「マックス様」

見かねてエンヒェンも入って来た。

「お嬢様の御言葉をお聞き入れ下さい」

「気持ちには有り難いけれど」

それでも彼は行かねばならないのであった。

「わかってくれ。これは君の為なんだ」

「鹿なんて何時でも手に入るわ。それよりも私は」

「鹿なんかじゃないんだ」

だが彼はここでこう言い放った。

「もっと大事なものの為に。そう、君の為に」

「私の……」

「それは明日わかる。だから……行かせてくれ」

そう言うと彼は足早にその場を去った。そして部屋を後にした。

アガールテは不安に満ちた顔でそれを見送った。もう何も言えな

った。エンヒエンはそんな彼女を励まし、元気付けることしかでき

なかった。彼女の顔にも不安と恐怖が浮かんでいた。

第二幕その三

深い山の中にその谷はあった。険しく、高い山々に囲まれている。側を流れる滝も高く、清明というよりは恐ろしさを感じさせる滝であった。

その谷の中は左右から嵐が雪崩れ込んでいた。荒れ狂う風とその音で支配されている。所々に雷で潰された岩や木の跡が転がり、残る岩や木々も禍々しい形をしている。そしてその上の月は無気味な程青白かった。

梟や獣の鳴き声が遠くから聞こえる。それ以外の存在の囁く声も聞こえる。

「フーーーーフイ！フーーーーフイ！」

それは地の底から、若しくは風の中から聞こえてくる。一つではなく無数に聞こえてくる。そして何やら人に似た声も聞こえる。

「月の乳は草に落ちたか？」

「うむ」

それに応える声もする。

「では蜘蛛の巣はどうなった？」

「血に染まっておる」

「そうか。ならば問題はない」

哄笑も混じる。

「では次の日の夕方までには」

「ああ、美しい花嫁は死ぬ」

「それはよきかな」

やはり風の中や地の底にあるような声であった。

「明日の夜の帳が世界を覆うその時までには」

「生け贄は我等の下に捧げられるのだ」

「よきかなよきかな」

「クツクツクツクツクツク」

やがてその笑い声も聞こえなくなった。見れば谷の中に一人の男がいた。獵師の服を着ている。カスパールであった。

彼は黒い石を使い闇の中で円陣を描いていた。細部に奇怪な呪文が書き込まれている。どうやら魔術のものらしい。

そしてその中央には髑髏が置かれ側に鷲の翼が置かれている。同時に釜と弾丸鑄型もある。何かを作ろうと考えているようだ。

「これでよし」

カスパールは陣を描き終えると顔を上げてそう呟いた。

「後は」

そう言いながら腰の鹿刀を取り出す。そしてそれを髑髏に突き刺して叫んだ。

「ザミエル！」

その名を叫ぶと場に何か得体の知れないものが漂った。

「ザミエル！」

もう一度叫ぶ。その得体の知れないものが見えてくる。それは黒い霧であった。

「出て来い魔王よ悪魔の髑髏の側に！」

見ればその髑髏は人のものとは微妙に異なっていた。角等こそないものの異様に大きい。そしてその歯は尖り、まるで獣のそれであった。

「ザミエル、来たれ！」

谷が沈黙に支配された。そして地の底が割れた。中からマックスを見ていたあの大男が姿を現わした。

「呼んだか」

その男はカスパールの前に立ってそう問うた。

「魔王ザミエルよ」

カスパールは彼を見上げてその名を呼んだ。

「俺の期限がもうすぐなのは知っているな」

「知らない筈がない」

彼は地獄の奥底から聞こえてくるような低い声で答えた。

「明日だ」
「そうだ、明日だ」
カスパールはそれを聞いてそう呟いた。
「もう少し伸ばせないか」
「それは出来ない」
ザミエルはそれに対して首を横に振った。
「契約は絶対だ。それは最初の契約の時に言った筈だ」
「しかし」
「しかしも何も無い」
ザミエルはあくまでそれを拒否した。
「魔界においても法は絶対だ。それは覚えておけ」
「………わかった」
カスパールはそれを受けて苦渋に満ちた声でそう答えた。
「ならば新しい生け贄を持って来る。それでいいな」
「それならばな」
ザミエルはそれには首を縦に振った。
「契約違反ではない。よいだろう」
「おお、それは有り難い」
カスパールはそれを聞いて顔を少し明るくさせた。
「そしてそれは一体誰だ？周りの者の声によると花嫁だというのが」
「フリーーファイ！フリーーファイ！」
それを聞いたか声がまた響いてきた。カスパールはそれを聞いて内心身震いを感じた。だがそれは決して顔には出さない。魔王を前にしてそれは出来なかった。
「俺の狩り仲間もだ」
「ほう」
それを聞いたザミエルの眉が少し上がった。
「では二人差し出すのだな」
「都合そういうことになる。これならどうだ」
「悪い話ではない。では生け贄を手に入れてからな」

「ああ、わかった」

カスパールはそれを聞いて安心したように頷いた。

「ところでだ」

ザミエルはここで質問を変えてきた。

「何だ？」

カスパールは一瞬ギョツとした。やはりそれは顔には出さない。

「その仲間は何を望んでいるのだ？」

「ああ、それか」

それを聞いて彼は胸を撫で下ろした。無理難題を言われたならばどうしようかと思っていたのだ。

「魔法の弾を望んでいるのだ」

「御前と同じか」

「ああ、全く同じ弾だ」

彼はそう答えた。

「七発の魔法の弾だ」

「そのうち六つは当たるが」

ザミエルはそれを聞いて呟く。

「七つ目は外れるあれだな」

「そうだ」

カスパールは頷いた。

「七つ目はあなたのものとなっているあの弾だ。それで花嫁の魂もあなたのものだ」

「そういうことか」

ザミエルは表情を変えずに頷いた。

「どうだ、これならいいだろう」

「それは後になってからわかることだ」

ザミエルの言葉は呆気ないものであった。しかしカスパールはそれでも引き下がった。

「しかし期限を延ばすのにはいいと思うが」

「御前の魂の身代わりとして」

「そういうことだ。三年分はあると思うが」

「確かに」

「ザミエルはそれを認めた。」

「ではそれは約束しよう。三年の延長をな。地獄の門にかけて」

「おお、それは有り難い」

「しかしだ」

「だがここでザミエルの声が鋭くなった。」

「それは明日の期限までに二人の魂が私の下に入ったならだ」

「それはわかつている」

「カスパールはその言葉に顔を一瞬青くさせて答えた。」

「しかし安心してくれ。俺が約束を破ったことがあるか？長い付き

合いで

「いや」

「ザミエルはそれには首を横に振った。」

「だろう？なら安心してくれ。いいな」

「わかった」

「ザミエルはそれを認めた。」

「しかし念を押しておこう」

「それでも彼はこう言った。」

「明日の期限………決して忘れぬようにな」

雷が鳴った。そして鈍い雷鳴が谷の轟く。その光がザミエルの禍々しい顔を映し出した。

雷鳴が消えるとザミエルもまた姿を消していた。後にはカスパールだけが残っていた。

見れば刀を差した髑髏は何処かへ消えていた。そのかわりに今まで髑髏があつた場所に小さな窯があつた。その中では灰火が燃えていた。

「消えたか」

「カスパールはそれを見て呟いた。だが辺りはまだ怪しげな気配に支配されている。」

第二幕その四

「だがいい。ことは俺の望む通りに進んでいる。今のところはな」
彼はここで腰にある水筒を手にとった。中には酒が入っている。
それを飲む。そして気を昂ぶらせた。

「だが問題はこれからだ。マックスの奴、果たしてここまで来るか」
窯の中の火を見る。見れば弱くなっているので薪をくべる。するとその周りに梟やその他の魔性の鳥達がやって来て翼を動かした。
それで火が起こった。

「手助けしてくれるか」

カスパールはそれを見てニヤリと笑った。

「有り難い。どうやら俺は魔物にも助けられているらしい」

そう言う彼の顔はそこにいる梟や他の鳥達と同じ顔になっていた。
それは完全に魔性の者の顔であった。ここで上から何か物音がした。
「ムツ!？」

それを聴いた彼は上を見上げた。するとそこにはマックスがいた。
「遂に来たか」

カスパールは彼を見て笑っていた。だがマックスはそれには気付いてはいない。

「地獄の沼を見下ろすようだ」

マックスはそのカスパールがいる谷を見下ろして呟いた。

「雷の音がして黒い霧と雲が覆っている。月の光すら届いてはいない。まるで魔界だ」

そう、そこはまさに魔界だったのだ。

「梟が時折姿を見せ赤い木の枝が私を誘うように蠢いている。風に揺られているのだろうか」

確かに谷の中は二つの流れの風が吹き荒れていた。マックスはそれを見てさらに顔を青くさせた。

「恐ろしい、だが行かなければ」

それでも行かなければならないのはわかっていた。

「アガーテの為に」

全ては彼女を手に入れる為に。彼は谷への入口に一步踏み込んだ。彼の心は不安と恐怖に揺れ動いていた。だがカスパールはそんな彼の心を見透かしたうえで笑っていた。

「そうだ、来い」

彼は言った。

「来て俺の身代わりとなるのだ」

彼の心にあるのはあくまで身代わりのことであつた。マックスをものとしてしか見てはいなかつた。

だがそれはやはり顔には出さない。マックスが側に来るとあえてにこやかな顔を作つた。

「よく来てくれた」

「ああ」

マックスは青い顔をして答えた。

「しかしとんでもないところだな」

「ここのことか」

「ああ。噂には聞いていたが」

マックスはそう言いながら谷の底を見回した。

「まるで魔界だ。上から見下ろすより余程恐ろしい」

「そうか」

しかしカスパールはその言葉を笑い飛ばした。

「だが俺はここで御前さんを待つていたのだぞ」

「済まない」

「まあいいさ」

あえて許した。

「時間がない、早くはじめよう」

「わかつた」

マックスは頷く。それを見届けたカスパールは彼を円陣に誘い込んだ。

「これは」
「見ればわかるだろう」
カスパールはそう彼に答えた。
「魔法の陣さ」
「それはもしかして」
「一体何に使うのかは彼も知っていた。」
「驚く必要はない」
「しかし」
カスパールに宥められても彼の心は平穏ではいらなかった。
「恐いのか」
「ああ」
彼はその恐怖心を抑えることができなくなっていた。
「あれを見る」
マツクスは森のある場所を指し示した。
「あそこにいるのは母さんだ」
「？俺には見えないが」
「僕には見えるんだ。死んだ時の姿で僕に帰れと言っている」
「馬鹿を言え」
だがカスパールはそれを否定した。
「御前さんの幻覚だ。怯えているからそんなものを見るんだ」
「いや、違う」
だが彼はそれを否定した。
「あそこにアガーテが見える。見えないのか!？」
「ああ、見えないな」
カスパールはそんな彼を一旦突き放した。
「いい加減に落ち着け」
「これが落ち着いていられるか。死人の様に青い顔をして死に装束を着ているのに」
「そりゃそうだろうな」
カスパールはそれを聞いて独白した。

「明日死ぬのだからな」

やはりこれはマックスには聞こえなかった。マックスはまだ言う。

「ここは一体何なんだ！？何故僕だけがこんな幻覚を見るんだ」

「それは御前さんが怯えているからだ。さっきも言っただろう」

やはりカスパールの声は冷たいものであった。

「違う、絶対に違う」

「じゃあそう思っておけ。だが気持ちは落ち着ける。いいな」

「………ああ」

マックスはそれには同意した。そしてカスパールは彼に酒の入った水筒を差し出した。

「飲め」

「わかった」

言われるままにその酒を飲んだ。そしてとりあえずは酒の力で気持を抑えさせた。

第二幕その五

「ではそろそろはじめるぞ」

水筒を返してもらい、それからマックスに言った。

「ああ」

マックスはそれに頷く。そしてカスパールは彼に対して囁いた。

「まず最初に言っておく。これからのことは誰にも言うな」

マックスにそう念を押した。

「わかった」

「それならいい。もしそれができないのなら忘れろ、いいな」

「ああ」

マックスは頷いた。

「よし」

カスパールはそれを見てようやく作業にかかった。

狩猟袋から次々と取り出す。暗闇の中だというのに手早い。

「まずは鉛だ。そして教会の壊れた窓ガラスを粉にしたもの」

次々に出す。

「そして水銀だ。一度撃つて当てた弾」

その弾丸には赤い血が着いている。

「ヤツガシラの右目に山猫の左目。これでよし」

その目は何も語らない。ただガラスの様に輝いているだけである。

それ等を全て窯の中に入れた。

「そして次は」

「次は」

「弾への祈祷だ」

「わかった。弾への祈祷だな」

「ああ」

マックスはカスパールに言われるまま彼に従って動きを続ける。

まずカスパールは地面に三回お辞儀をした。そして詠唱した。

「闇を守る狩人よ」

「闇を守る狩人よ」

マックスもそれにならって詠唱する。

「ザミエルよ、偉大なる墮天使よ」

「ザミエルよ、偉大なる墮天使よ」

その名を口にした時マックスの全身に寒気が走った。

恐ろしかった。だが今更にげだすことができないのもわかっていった。

「この夜、魔術が行われる間我を護ってくれ」

「この夜、魔術が行われる間我を護ってくれ」

ここで窯の中が沸騰をはじめた。

マックスはそれを見て驚いた。しかしやはり逃げられはしなかった。

「草と鉛に香油を塗ってくれ」

「草と鉛に香油を塗ってくれ」

「七と九と三を祝福せよ」

「七と九と三を祝福せよ」

窯の沸騰はさらに激しくなる。カスパールはそれに構わず詠唱を続ける。

「弾に威力を与えよ！」

「弾に威力を与えよ！」

窯から白緑色の不気味な光が溢れ出て来た。あたりはさらに暗くなる。窯の火と梟の黄色い目、そして朽ち果てた木の洞の中の青白い鬼火の様な光だけが見える。

「ザミエル、来たれ！」

「ザミエル、来たれ！」

詠唱はそれで終わった。カスパールは窯に手を突っ込んだ。そして弾を取り出す。

「一つ！」

「一つ！」

山彦が繰り返す。谷に棲む無気味な鳥達が降りて来て魔法陣を取り囲んだ。

「二つ！」

「二つ！」

黒い猪が藪の中から出て来てこちらに来た。まるで火の様に爛々と輝く目を持っている巨大な猪であった。

「三つ！」

「三つ！」

嵐が起こった。木の枝が折れ、火の粉が散る。

「四つ！」

「四つ！」

今度は蹄の音がした。鞭の音も轟き、四台の炎の車が通り過ぎた。御者は見えなかった。影に包まれていたからだ。だがそれが異形の者達であることはわかった。

「五つ！」

カスパールの声はさらに恐ろしくなっていく。

「五つ！」

それを繰り返す山彦の声も。まるで怪物の様であった。

天から獵犬の吠える声が聞こえる。そして狩人達が駆ける。暗い天をだ。馬もいた。青白い、炎の鬘を持つ馬であった。その狩人達が叫んでいた。

「山を越えよ、谷を越えよ！」

天にいる筈なのに地の底から聞こえてくるようであった。

「淵や山峡を越え、霧も雲も越えよ！」

明らかに人の声ではなかった。

「空も沼も、裂け目も問題ない。火も岩も我等を阻むことはない。海や空も越えよ！」

「ヨーーーーホーーーー！ホーーーー！ホーーーー！ホーーーー！ホーーーー！」

気味の悪い叫び声まで聴こえてくる。だがそれで終わりではな

った。

「六つ！」

「六つ！」

カスパールの声は続く。彼は周りのことには目はいつていなかった。

空がさらに黒くなる。谷の中を荒れ狂っていた二つの嵐は一つとなり、恐ろしい雷光と雷鳴が轟く。激しい雨、青い火が天と地を覆う。木々は雷に打たれて燃え上がり、嵐やその木や岩を砕き宙に運ぶ。大地も揺れた。

マックスは一步も動くことができなかった。ただその荒れ狂う様を見るだけであつた。そしてカスパールは遂に最後の言葉を叫んだ。

「七つ！」

「七つ！」

それで終わりであつた。だがカスパールは最後に絶叫した。

「ザミエル！」

「ザミエル！」

山彦も一緒に絶叫した。嵐が天空に舞い上がり、魔法陣の周りにた者達が消え去つた。そして青い炎に包まれた魔界の住人が二人の前に姿を現わした。

「我を再び呼ぶか」

青い炎が消えていく。中から先程カスパールが会っていたあの魔王が姿を現わした。

「ああ」

カスパールはそれに答えた。

「約束通り頼むぞ」

「わかつた」

ザミエルはそれに頷くとマックスに顔を向けた。

「そなたか」

「はい」

マックスは青い顔で答えた。

「その弾をカスパールより受け取るがいい」

「わかりました」

彼は答えた。その言葉に従いカスパールから弾を受け取る。

「これでよし」

ザミエルとカスパールは同時にそう言った。だがその表情が異なっていた。

ザミエルは無表情であった。青い顔からは何も読み取れない。だがカスパールは酷薄な笑みを浮かべていた。だがマックスはそれには気がつかなかった。

「さらばだ」

ザミエルはその弾丸がマックスに渡つたのを見届けると姿を消した。それを見たマックスは力尽きたようにその場に倒れ込んだ。

「恐怖に最後まで耐え切ったか。だがそれに力尽きたようだな」

立ち上がったカスパールは彼を見下ろしてそう言った。

「息はあるな。もつともこの程度で死ぬ筈もないが」

マックスは息はしていた。だがその顔は恐怖のせいも蒼白なままであった。

「もつとも今日までの命だ。明日になれば貴様は魔王の下だ」

やはり酷薄な笑みを浮かべていた。

「貴様の愛しい花嫁と共にな。そして俺は」

また姿を現わした月を見上げた。青白い月を。

「また命を授かる。そして永遠に生きるのだ」

月を見上げて笑っていた。その顔は完全に夜の世界の住人のそれであった。

第三幕その一

第三幕 神の加護と救い

森の中である。ここに獵師達が集まっていた。

「素晴らしい日になりそうだな」

その中の一人が森を眺めてこう言った。

「ああ、全くだ」

同僚の一人がそれに同意する。

「昨日はとんでもない嵐だったからな。こんないい天気になるとは思わなかったよ」

「あの嵐の原因を知っているか？」

「いや」

彼は同僚に答えた。

「狼谷でな」

「あの谷か」

彼はそれを聞いて眉を顰めさせた。

「ああ、出たらしいんだ」

「悪魔がか」

「そうだ、またな」

その狩人は同僚に囁くようにして言った。

「あの谷にだけは近付くなよ」

「わかっている」

それは狩人達の暗黙の掟であった。

「悪魔に魂と売り渡すところだからな」

「そういうことだ」

「あんな場所に行く奴の気が知れないよ」

「全くだ」

彼等がそう話しているとマックスが来た。

「おう、マックス」

彼等は気さくに彼に声をかけてきた。

「どうだい、調子は」

「ええ」

彼はそれに丁寧な物腰で応えた。

「何とも言えませんが」

「おいおい、大丈夫か」

「謙虚なのはいいことだがな」

彼等はマックスの本来の腕を知っている。

「今日で御前さんも結婚か羨ましいなあ」

「おい、御前はもう結婚しているだろうが」

「おっと、そうだった」

彼等は冗談混じりにそんな話をしていた。それを見るマックスの目が細くなった。

ここにカスパールが来た。獵師達は彼にも声をかけてきた。

「あんたも頑張れよ」

「おう」

彼はそれに元気よく応えた。

「まあ任せておけ」

彼もまた仲間達からは腕のよい獵師として知られていた。だがその真実までは知らなかった。

獵師達は先に進んだ。カスパールは彼等を見ながらマックスに囁きかけてきた。

「わかってるな」

「勿論だ」

マックスは暗い顔をして頷いた。

「弾はまだ持っている」

「よし、幾つだ」

「一つだ」

マックスは答えた。

「さっき領主様の前で三つ使った。御前は幾つ使った？」

「二つだ」

「何!？」

マックスはそれを聞いて思わず声をあげた。

「おい、正気か」

「何を言っているんだ」

「あと一発ずつしかないんだぞ」

彼は純粹に弾の数だけを気にしていた。実はこの魔法の弾の真実を聞かされてはいないのだ。

「それがどうした」

教えた張本人はしれつとしていた。当然である。

「一発あれば充分じゃないのか」

「うう……」

マックスは逆にそう言われて言葉を詰まらせた。

「その魔法の弾のことはもうわかった筈だ。それでいいだろう」

「言われてみればそうだが」

「その一発を大切にしろよ」

ここで彼は心の中でこう言った。

(御前とアガーテを地獄に誘う弾なのだからな)

しかし心の中の言葉であるのでマックスには聞こえはしなかった。

「わかった。じゃあこれで決めよう」

「そうこなくちゃな」

ここでマックスを呼ぶ声がした。彼はすぐにそちらに向かった。

「ふふふ、全ては計画通りだ」

カスパールはマックスの後ろ姿を見送って悪魔的な笑みを浮かべた。

「これであいつとアガーテはザミエルのものになる。そして俺はこれからもこの世を楽しむというわけだ」

ここで狐を見かけた。

「これだな」

すぐにその狐を撃った。狐はもんどりうって倒れた。

「これはマックスとアガーテにやるとしよう」

悪魔的な笑みのままそう言った。

「地獄への手土産にな」

マックス達が森の中にいる時アガーテは自宅で婚礼の準備に取り掛かっていた。

古く、質素だがそれでいて美しく装飾された部屋である。窓の側には花瓶がありそこにはあの白い薔薇がある。それは窓から入る太陽の光に照らされて白く輝いていた。

アガーテはその中にいた。白い花嫁衣裳に緑のリボンを身に着けている。花瓶の白い薔薇の前に跪いていた。

「天におわします気高き主よ」

彼女は薔薇に語りかけていた。

「今日のこの素晴らしい日を受けて下さったことを深く感謝致します。願わくば私とあの人に永遠の幸福をお授け下さい」

それは彼女の深い信仰心から来る言葉であった。魔物が潜む暗い森の中にあつて神の力はいくまで偉大なものであるのだ。

「私にあの人を、そしてあの人に私を。その御力でお授け下さい」

最後にそう言うゆつくりと立ち上がった。ここにエンヒエンが入って来た。見れば彼女も盛装である。

「ここにいらしたのね」

「ええ」

アガーテは彼女に顔を向けて答えた。

「ではそろそろ行きませんか」

「その前に聞いて欲しいことがあるのだけれど」

「何でしょうか」

おおよその見当はついていて。彼女の晴れない顔を見ればわかる。

「昨日の夢だけけれど」

「いい夢ではなかった」

「ええ。私は白い鳩になつて」

「いい夢じゃありませんか」

「それだけならいいのだけれど。あの人に撃たれてしまうの」
「それで!？」

流石にそれを聞いてはエンヒエンも穏やかではいらなかった。
「けれどすぐに起き上がって。そのかわりに黒い大きな鳥が倒れて
いたわ。私は無事だったの」

「それは非常にいい夢だと思いますよ」

「そこまで聞いて安堵した顔で答えた。」

「そうかしら」

「結婚の前の日に見る夢はこれからの生活の予兆です」

「それは前に聞いたけれど」

「雨蛙が天気を告げるのと同じで。それはきつと吉兆ですわ」

「それならいいのだけれど」

それでもアガーテの顔は晴れない。見るに見かねたエンヒエンは
そんな彼女に対して言った。

「白い鳩は幸福、そして黒い鳥は災厄です。お嬢様が災厄から救わ
れるということですよ」

「そうなのかしら」

「ええ」

エンヒエンは彼女を元気づけるように強い声で応えた。

「だからそんなに落ち込まれることはないですよ」

「わかったわ」

アガーテはそう答えた。だがやはりその顔は晴れない。エンヒエ
ンはそんな彼女に対して遂にこう言った。

「では一ついいお話を致しましょう」

「お話？」

「そうです。お嬢様が望まれているお話をです。宜しいですか？」

「ええ、どうぞ」

彼女はそれを薦めた。エンヒエンはそれを受けて話をはじめた。

「私の従姉のお話ですけれどある日寝ていたら急に無気味な気配が
しました」

「真夜中に!？」

「はい。部屋の扉が開いて何かがやって来ます。火の様に燃え盛る瞳を持って鎖を鳴らしながら」

「それはもしかして」

「お話は最後までお聞き下さい」

エンヒエンはここで微笑んで彼女を制止した。

「その様子に驚いた彼女は思わず悲鳴をあげました。そしてそれを聞いた家の人達が見たものは」

「何だったの？」

「犬でした」

「犬!？」

「そう、買っていた家の犬でしたの。とんだ化け物でしたの。そういうお話ですわ」

「よくあるお話ね」

アガーテはそれを聞いて少し溜息を出した。

「けれど少しは気持ちは上向いたではありませんか？」

「ええ」

それは事実であった。アガーテはほんの少し笑ってそれに応えた。

「花嫁はそうではなくてはいけませんわ。笑っていないと」

「そうね」

アガーテはようやく彼女の言葉に笑顔で頷くようになった。

「貴女の言葉に従うわ」

「そう」

彼女はアガーテのその言葉を聞き満足したように頷いた。

「そうではなくてはいけません」

「ええ」

「花嫁に相応しいのは悲しい顔ではありませんわよ」

またアガーテを元氣付けるように言った。

「明るい顔こそが相応しいのです。周りを幸せにするような顔が」

「それが花嫁の務めなのね」

「そうですね、その通り」

彼女は言葉を続けた。

「回りを言ばせるのが。悲しみは別の仕事、少なくとも花嫁の仕事
ではありません。ですから」

またアガーテに言う。

第三幕その二

「薔薇の様に明るい笑顔をお願いしますよ」

「わかったわ」

ようやく彼女は明るさを取り戻してきた。

「そうよね。私が明るい顔をしていないとあの人も心配するわ」

「その通り」

それに合わせて頷く。

「では花の冠を」

「あら、忘れていたわ」

ハツとして気がついた。

「すぐに取りに行かないと。大変なことになるわ」

「そうです。お急ぎあれ」

エンヒェンはわざと急かした。

「いえ」

しかしすぐに思い直した。

「私が取りに行きます。ここでお待ち下さい」

「頼めるかしら」

「それが私の仕事ですから」

そう言って部屋を後にした。入れ替わりに扉をノックする音が聞

こえてきた。

「どうぞ」

彼女はそれに入るように言った。すると数人の着飾った少女達が入って来た。それは花嫁の付き添いの少女達であった。

「いらっしやい」

アガールテは笑顔で彼女達を出迎えた。

「はい」

見ればその着飾った服はこのボヘミアの服であった。アガールテのそれとは違い花環や花は付けてはいない。

「このすみれ色の絹を」

一人がアガーテに絹を差し出した。

「有り難う」

彼女はそれを受け取った。そしてそれを肩に巻く。もう一人前に出て来た。

「私はこれを」

それは緑の花輪であった。

「喜んで」

アガーテはそれも受けた。

「頂くわ」

「はい」

こうして彼女は次々に飾られていった。少女達はそんな彼女を微笑みながら見ている。

また出て来た。今度は金色の亜麻であった。

「まあ」

彼女はそれを見て顔を綻ばせた。

「何て美しい」

そしてそれを身に纏った。白を基調として多くの色に飾られていった。

「後は一つだけですな」

「ええ」

少女達はそう話した。

「花の冠だけ」

「けれどそれももうすぐ」

そこにまた扉をノックする音が聞こえて来た。

「どうぞ」

アガーテが入るように言うとエンヒエンが入って来た。そのてには紐で結んだ丸い箱がある。

「それは」

「遂に届きましたよ」

彼女はアガーテに満面に笑みを浮かべてそう答えた。

「じゃあそれは」

「はい、花の冠です」

彼女はそう答えた。そしてアガーテの前にやって来る。

まずは紐を解いた。そしてそれをアガーテの前に差し出した。

「どうぞ」

「ええ」

アガーテはそれを受け取った。それからゆっくりと開ける。しかしその中にあるものを見た瞬間彼女だけでなく他の者も皆凍りついた。エンヒエンもである。

「これは……」

それは何と葬式用の銀の冠であったのだ。あまりにも不吉なものであった。

「死の冠。どうしてこんなものが」

アガーテの顔は再び青くなっていった。

「これは何かの間違いですよ」

エンヒエンはそれを見て慌ててその場を取り繕った。

「使いの者が誰かが間違えたのでしょうか。けれどその責任は問わないで。神聖な婚礼の場なのですから」

「え、ええ」

アガーテも少女達もそれに頷いた。

「このことは忘れましょう。いいですね」

「はい」

エンヒエンに言われ皆頷いた。こうしてこの場は何とか収まった。

「とりあえず花の冠ですが」

「それだったら」

アガーテがここで口を開いた。

「薔薇を使いましょう、白い薔薇を」

そう言って花瓶にあるあの白い薔薇を指差す。

「隠者様から頂いたあの白い薔薇を。それならいいでしょう？」

「あ、それでしたら」

エンヒエンはそれを聞き明るい顔に戻った。

「よろしいかと。では早速花の冠を作りますね」

「ええ、お願い」

こうしてエンヒエンは花瓶の側に行き素早い動きで花の冠を作った。そしてそれをアガーテの前に差し出す。

「どうぞ」

「はい」

あらためてその冠を受け取る。そして彼女はそれを被った。

「まあ」

それを見たエンヒエンも少女達も思わず感嘆の息を漏らした。あまりにも美しい姿だからである。

「どうかしら」

アガーテは彼女達に尋ねてきた。

「とてもいいですわ」

皆口を揃えてそう答えた。

「それでしたら問題はないと思います」

「それどころかかえってよいような」

「じゃあこれで行くわね」

アガーテもそれを聞いて安心した。そしてそう尋ねた。

「はい」

皆それを認めた。アガーテはそれを聞いてまた微笑んだ。

「よかった、さつきはどうなることかと思っただけねど」

そして頭にある白い薔薇に手をやった。

「頼むわね。婚礼の間私を護ってね」

隠者に言われた言葉を思い出していた。そして彼女はエンヒエンや少女達と共に婚礼の場に向かうのであった。

第三幕その三

その頃婚禮の場でもある大会の場所では獵師達が集まっていた。そして領主である侯爵オットカールを囲んで酒を楽しんでいた。

「皆の者」

気品のある長身で口髭を生やした髭と同じ黒い髭の男が獵師達に声をかけていた。彼がその侯爵オットカールその人である。

「今日は楽しもうではないか」

「はい！」

彼等は杯を掲げてそれに応えた。

「この世で狩人の楽しみに優るものはなし、生命の杯は絶え間なく誰に向かつて泡立ち溢れるのであるうか。それは最早言うまでもない」

彼等は口々にこう言った。

「角笛の響きを聞いて緑の野を進み、森や沼を越えて鹿を追う。これこそ男の憧れであり王者の楽しみだ。身体は鍛えられ、食事は旨い。森や岩山が我々を出迎えその中に入る。そして全てが終わった後我等はこうして酒を共に楽しむ！」

そしてその酒を一斉に口にした。

「狩の女神アルテミスが我等を護る。そして我等は誇り高き狼や猪をも倒す。これが王者の楽しみでなくて何と言おうか！」

「うむ、全くその通りだ」

オットカールは彼等の声に目を細めていた。

「そして今日はそれだけではないぞ」

「はい」

獵師達は彼の言葉に頷いた。

「素晴らしい婚禮がある」

「マックスの」

皆オットカールの言葉に頷いた。

「その通り。私は今日という日をどれだけ待ち望んだか。私は二人が小さい頃から知っている」

「はい」

「クーノよ、覚えているな」

ここでクーノに声をかけた。

「はい」

彼はそれに応えた。

「忘れる筈ありません」

「そう、私がまだ髭も生えていない頃マックスもアガーテもほんの子供であった。その頃からマックスは凜々しく、アガーテは可愛らしかった」

「はい」

「幼いアガーテが狐に追いかけられている時にマックスが助けに入った。弓で仕留めたのだ」

「偶然側にあつた弓で。あれは驚きました」

「それを見て思ったのだ。この二人は将来きつとこの村で名のある二人になると。そしてこの二人は結ばれるべきだと」

「つまり二人はその時から結ばれる運命だったのですね」

「私はそう思う」

オットカールは獵師の一人の言葉に頷いた。

「そして今日のこの日だ。ようやく来たと言うべきか」

「はい」

クーノはそれにまた頷いた。

「私もどれだけ待ち望んだことか」

「そう、ではそろそろはじめるか」

「試験射撃を」

「マックスはいるか」

「彼は」

見れば森の中からやって来る。カスパールはそれを一同の端から見ている。

「おお、来たか」

「はい」

マックスはオットカールの前にやって来た。

「申し訳ありません、遅れてしまいました。準備に手間取ってしまいました」

「よい。準備がなくては何も出来はせぬからな」

彼はそう言つてマックスを許した。

「そして」

さらに辺りを見回した。

「女達はまだか」

「そついえば遅いですな」

クーノも猟師達も辺りを見回した。

「ですがかえつて好都合ですな」

「どうしてだ？」

オットカールはクーノに問うた。

「娘がいないうちに試験が出来るからです」

「花嫁の前で自分の栄光を見せられるではないか」

「そう考える者もおりますが」

クーノはここでこう断つた。

「そつでない者もおります。とりわけマックスは」

そつ断つてから話した。

「善良な若者です。そして純粹です」

「それは知つているつもりだ」

「だからこそ娘を前にして試験をさせたくはないのです」

「緊張するということか」

「はい。ですからここは早く済ませたいのですが」

「そつという考えもあるが」

だがオットカールはその提案には否定的であつた。

「これは古いしきたいだ。それはわかつていよう」

「はい」

クーノもそれは知っていた。試験射撃は花嫁となる娘の前で行う
しきたりなのである。

「それはわかっているな」

「無論です」

「ならばよい。確かにそなたの気遣いはわかる。だがな」

オットカールは言葉を続けた。

「そうした緊張にも勝たなければならぬのだ。わかるな」

「はい」

「だがな」

しかし彼はここで譲歩することにした。

「古い獵師達が別の考えならばそれを聞こう。どうだ」

その古い獵師達だけでなく若い獵師達にも問うた。

「そなた達の考えを聞きたい」

彼は人の話をよく聞く領主として知られていた。こうして他の者
の意見もよく聞いたのである。

「はい」

皆それぞれ口を開いた。

「早いうちに済ませるべきだと思います」

一人がそう言った。

「ほう」

オットカールはそれを聞いて眉を少し上に上げた。

「私もです」

別の若い獵師もそう主張した。

「ここはクーノ様の御考えに賛成します」

「マックスに楽な気持ちで試験を受けさせてやって下さい」

「そして彼に花嫁を」

皆すぐに試験をはじめることを主張した。

「わかった。皆の考えはよくわかった」

オットカールは全てを聞き終え鷹揚に頷いた。

「決まったぞ、マックス」

「はい」

再び彼に顔を向けた、マックスはそれに応える。

「今すぐに試験を行う。よいな」

「わかりました」

マックスはここでは胸の中の不安を押し殺した。

「はじまるか」

カスパールは何時の間にか木の上に登っていた。そしてそこからマックス達を見ている。

「丁度来ているし」

下を見る。そこには着飾ったアガータ達がいる。

「魔王の呪いからは逃げられんさ。地獄で仲良くな」

ニヤニヤと笑いながらそれを見ていた。マックスはオットカールに挨拶をしていた。

第三幕その四

「それでははじめさせてもらいます」

「うむ」

彼はそれを認めた。

「さっきの様にな。落ち着いていけ」

「はい」

「目標は、だ」

丁度ここで白い鳩が目に入った。

「あれがいいな。よく目立つし」

「あの鳩ですね」

「そうだ。撃てるな」

「勿論です」

だがここで魔弾のことが気にかかった。一抹の不安が胸によぎる。

（大丈夫だ）

自分にそう言い聞かせる。今までも確実に当たっているからだ。

（魔法の弾だ。絶対に当たる。だから安心しろ）

必死に言い聞かせている。胸の中の不安を必死に抑える。

「ではよいな」

ここでオットカールの声を聞いてハツとした。

「撃ってみよ」

「はい」

頷く。そして白い鳩に向けて構えた。

「おっ」

ここでアガーテ達 came。獵師達はそちらに目を向けた。

アガーテもマックスを見た。だがその先にある鳩に気がついた。

あの白い鳩だ。

「マックス！」

彼女は思わず叫んだ。

「その鳩は撃たないで！」

「その声は！？」

マックスは耳に入ったその声に反応した。だが目と神経は鳩から離しはしない。猟師としての習性が彼をそうさせた。

「いよいよだな」

カスパールはそれを見てやはり笑っている。その彼のところに白い鳩が来る。しかしそれには気がつかなかった。これが命取りになった。

マックスは撃った。その魔弾が放たれた。

それは目には見えないが奇妙な動きをした。何とアガーテに向かったのだ。銃口が向けられてはいないというのに。

しかしそれは彼女の目の前で軌跡を変えた。そして鳩、その真後ろにいたカスパールに向かった。

「ああ！」

カスパールとアガーテは同時に倒れた。皆それを見て顔面を蒼白にさせた。

「まさか！」

「カスパール、どうした！」

そこにカスパールも落ちて来た。オットカールとその周りの者はアガーテの方に駆け寄った。マックスもだ。狩人達はカスパールの方に駆け寄った。そして彼等を見る。

「アガーテ！」

「お嬢様！」

オットカールとエンヒエンが倒れているアガーテに声をかける。見れば傷はない。

「大丈夫だ、傷はない」

オットカールがそう言うと彼女はゆっくりと目を開いた。

「生きていたか」

皆それを見てホッと胸を撫で下ろした。とりわけマックスの顔に血の気が次第に戻ってきた。

「私は生きているの？」

彼女は信じられないといった顔であった。

「信じられないわ」

「よかった、生きていたんだ」

クーノが娘を抱いた。アガーテはその抱擁を受けようやくどうなつたのか理解した。

「助かったのね」

「そうだ。弾は当たらなかった」

「当然だ。マックスは彼女に銃を向けてはいなかった」

オットカールはここでそう言った。だがそれを聞いたマックスの顔がまた青くなった。

「まさか……」

「どうした、マックス」

オットカールはそんな彼に声をかけた。

「いえ……」

だが彼はそれについて語ろうとしなかった。話せる筈もなかった。ところで弾は

クーノがその弾に気付いた。

「一体何処に」

「そう、それだ」

オットカールも彼と同じ考えであった。

「見ればカスパールが倒れているが」

「しかしマックスは彼を狙ってなぞおりませぬぞ」

「だがああして今倒れているのだが」

「ううむ」

クーノは倒れているカスパールを見て考え込んだ。彼は胸から血を流していた。

「ウググ……」

「おい、大丈夫か」

同僚達が彼を気遣う。だがその傷が致命傷であるというのは誰に

もわかることだった。助かるとは到底思えない傷であった。

「しかし何故マックスの弾が」

「ああ、あいつはカスパールなんか狙ってはいないのに。どういうことだ!？」

獵師達は首を傾げる。カスパールはそんな中で呻いた。

「クソツ、あの娘に神の加護があったとは」

「何!？」

獵師達だけでなくそこにいた全ての者が彼の言葉に顔を向けた。

「今何と」

だがカスパールは意識が混濁しているのか周囲のことにまで考えが至ってはいなかった。

「迂闊だった。まさかこんなことがあるうとは」

「おい、カスパール」

周囲の者が声をかけるがそれでも彼は気付かない。

「一体どうしたんだ!？」

「ザミエル、それでも御前は満足なんだろう」

「ザミエル……」

その名を聞いて震えない者はいなかった。森に潜む魔王の名だ。

「おい、見る!」

皆異様な気配に気付き気配がした方に顔を向ける。するとそこに陰気な顔をして濃い髭を生やした大男がいた。

「ザミエル……!」

カスパールは彼の姿を認めてそう叫んだ。

「あれがか」

皆魔王の姿を見て息を呑んだ。

「迎えに来たのか、この俺を」

「まさかこの男は」

皆カスパールはその言葉に沈黙した。

「悪魔に魂を売ったのか!？」

その通りであった。そしてカスパールは自らの言葉でそれを証明

した。

「ならば持つて行け、地獄へも何処にも行つてやるう」

「やはり……」

彼等は言葉を失った。

ザミエルはただカスパールを見ている。陰気な顔のまま表情は変えない。

「それもこれも神のせいだ。それさえなければ俺は地獄に行かずに済んだものを」

「……」

今度は神を呪った。それがどれ程恐ろしい言葉であるのかわからない者はいない。

第三幕その五

「神なぞ滅んでしまえ！貴様のせいで俺は地獄に落ちなければならぬのだ！」

それが最後の言葉であった。カスパールは最後に叫ぶと恐ろしい顔を凍りつかせたまま息絶えた。ザミエルはそれを見届けると姿を消した。その後には無気味な瘴気が漂っていた。

「今のが魔王ザミエル」

「それに連れて行かれたということは」

彼は悪魔に魂を売っていたのだ。

「あれが死の際の言葉だというのか」

「神を呪うとは」

「元々そうだった男だったということだ」

クーノがここでこう言った。

「そして今天罰が下ったのだ」

「天罰が」

「そうだ。悪魔に魂を売ったからだ。だからこそ神さえも呪った」

「はい」

「呪われた男だ。まさかこの村にこの様な男がいたとは」

オットカールは嫌悪を露にしていた。

「その男の死体を運び去れ。そして狼谷に捨てるのだ」

「はい」

すぐに数人の男が動いた。

「悪魔に魂を売ったのだ。そうした輩にはあの谷こそが相応しい」

「わかりました」

こうしてカスパールの死体は運び去られた。だが問題はこれで終わりではなかった。

「マックスよ」

オットカールは険しい顔で彼に声をかけた。

「はい」

マックスは青い顔をしてそれに応える。

「話はまだ終わってはいない」

「はい」

「謎は解かれてはいないのだ。それはそなたの口からわかることだ」

「はい」

「ありのままを話すがよい。わかったな」

「わかりました」

彼はわかつていた。全てを諦め観念していた。

「それではお話します」

「うむ」

「先程私が撃つたあの弾はカスパールより貰ったものです」

「何と……」

それを聞いて皆絶句した。

「あのマックスが」

そして誰もが驚いていた。

「続けよ」

オットカールは彼に話を続けさせた。

「誘惑に負け彼と共にあの魔王の力を借りました」

「狼谷でか」

「はい」

「あの谷に何がいるのかわかっていたうえであるうな」

「はい。そして今日撃つた四つの弾丸を手に入れたのです」

「その言葉、偽りではないな」

「はい」

マックスは自分の言葉に嘘がないことを述べた。

「全て真実でございます」

「そうか、わかった」

カスパールは全てを聞き終えた後であたらめて頷いた。

「マックスよ、そなたを追放とする。よいな」

「えっ……！！」

それを聞いたアガートとクローノが声をあげた。

「再び私の治めるこの国に入ってはならん。よいな」

「はい」

マックスは口ごたえすることなくその言葉に頭を垂れた。

「わかっております」

「お待ち下さい」

だがここでアガートとクローノが間に入って来た。

「これは何かの間違いです」

「そうです、魔がさしたのです」

二人はそう言ってマックスを庇う。

「どうかお慈悲を。彼を許して下さい」

「駄目だ」

だがオットカールの態度は頑なであった。

「魔王の力を借りた男を許すわけにはいかん」

「そこを何とか」

「お願いします」

二人は必死に懇願する。周りの者もそれに心を動かされた。

「侯爵様」

彼等もオットカールに声をかけてきた。

「お願いです、ここはお怒りをお収め下さい」

「そうです、お慈悲を」

「法を曲げるわけにはいかないのだ」

だがオットカールは人としてよりも君主としてのあり方をとった。

「魔王の力を許せばどうなる？この国は悪魔が支配することになる

のだぞ。それでもよいのか？」

「それは……」

これには反論できなかった。彼等も沈黙するしかなかった。だがここで質素なローブに実を纏った老人が出て来た。見れば白く長い髭を生やしている。

第三幕その六

「領主殿」

彼はオットカールに声をかけてきた。

「貴方は」

オットカールは彼の姿を認めてハツとした。

「隠者様。 どうしてここに」

彼こそアガーテに白薔薇を授けた隠者その人であった。

「その若者について貴方は御存知の筈ですが」

隠者は静かな声でオットカールに語りかけてきた。

「私もその若者については聞いておりますぞ」

「はい」

オットカールはそれに頷いた。

「私も彼についてはよく知っているつもりです。 しかし」

「罪は許せないと仰りたいのですな」

「はい」

彼はそれを認めた。

「罪は罪です。 しかも魔王の力を借りた」

「そそのかされて」

「それでも罪は罪です」

「領主殿」

彼は少し語気を強くさせた。

「神は慈悲を望んでおられます」

「しかし」

「御聞きなさい」

隠者は今度は優しい声でそう語りかけた。

「御自身の中に聞こえる神の御言葉を」

「私の中に」

「そうです。 何と言っておられます?」

「それは」

隠者の言う通りであった。オットカールもそれを認めた。だがやはり法への意識が彼の心にあった。

「ですが」

「仰りたいことはわかります」

隠者は言った。

「ではこうしてはどうですか」

「どうするおつもりですか？」

オットカールは問うた。

「彼に一年の猶予を。罪は犯しましたがその心は清く、そして悔いておりますから」

「一年ですか」

「左様、そして一年後のこの日に」

「再び試験射撃を行うべしということですね」

「そうです、そうすべきかと」

「わかりました」

オットカールはそれに頷いた。

「全ては神の望まれる通りに」

「左様、そうされるべきです」

隠者の目が温かくなった。

「神こそが法なのですから」

皆隠者を尊敬の目で見ていた。だが彼はそれに奢ることなくマックスをオットカールの前に連れて行った。

「さあ領主殿」

「はい」

「この純粋な若者に今神の御加護を」

「わかりました」

オットカールは頷く。そして彼はマックスが前に来るとまずその名を呼んだ。

「マックスよ」

「はい」

マックスはそれに応えた。

「神の恩恵が与えられた。そなたに一年の時が与えられたのだ」

「はい」

「私は待っているぞ。そなたが一年後アガーテと結ばれるのを」

「わかりました」

彼は謹んで頭を垂れた。

「神の示される神聖な正義と義務に従いましょう」

「うむ、頼むぞ」

オットカールの声も温かいものになっていた。隠者に示された神の心に触れたからであった。

「そう、これでいいのだ」

隠者は跪くマックスの姿を見てそう言った。

「罪は清められる。そして清められた若者はまた歩きはじめるのだ。これでよいのだ」

「隠者様」

アガーテが彼の前にやって来た。

「有り難うございます。私だけでなくマックスまで」

「清らかな娘よ」

隠者は彼女に声をかけた。やはり温かい声であった。

「私の力ではない。全ては神の御力だ」

「神の」

「そうだ。だから全ては神に感謝するのだ。私ではなくな」

「はい……」

アガーテはその言葉に頷いた。

「全ては神の思し召し。それに心から感謝致します」

「うむ、それでよい」

隠者は目を細めた。クーノがそこに来る。

「アガーテ」

「はい」

娘に声をかける。アガーテはそれを受けて顔を上げた。

「一年待つのだ、よいな」

「はい」

「マックスは一年の間により立派になる。そして御前を迎えに来るだろう。そうだな、マックス」

「はい」

立ち上がっていたマックスは彼の言葉に頷いた。

「必ずや。その時までお待ち下さい」

「うむ」

クーノはそれを受けて力強く頷いた。エンヒエンも出て来た。

「お嬢様」

彼女はアガーテに声をかけた。

「その時はまたその服を着ましょう。そしてその時こそ」

「ええ」

アガーテは頷いた。

「私はその時は心揺れることなく向かいます」

「はい」

エンヒエンも笑顔で頷いた。全てを見届けた隠者はここで全ての者に語りかけた。

「全ては神の御心。我々はその慈悲に感謝するべし」

「はい」

皆彼の後ろに集まって来た。

「天を見よ、主が我等を見ておられる」

太陽が輝いていた。それはそこにいる全ての者を照らしている。

「清らかな心を持つ者は神の情を受ける」

「そして我等はここにいます」

「その通り」

隠者はその言葉に頷いた。

「さあ祝おう、そして感謝しよう。この神の温かき御心に。我等を愛し、そして祝福して下さるその慈悲深き神に」

皆天に祈っていた。罪が清められ、赦されたことに深く感謝の念を抱き続けそこで跪き祈っていた。来るべき幸福の日を信じながら。

魔弾の射手

完

2005・1・13

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3516f/>

魔弾の射手

2011年4月28日00時35分発行